平凡（三十六）

二葉亭

私は長時分吉田松陰崇拝であつた。将来の自由党の名士を以て自任してゐるのなら、グラッドストンかコブデン、ブライトあたりに傾倒すべきものだが、何しろ機だつて其人を似せ、常かゝる行回猛士とか潜して、

ゐ、松陰に心酔してつて、書風まで真似

小松陰にしてみると迄は眼がないが、嘉んでゐる

困つた事には新うざらると世間に後り偉い人

コノ間、一葉脱落

りに倒すべきなれども、お伝しと撥だつと
ろ、柳に心酔して了つて、書風までめ
て其人に似せ、家かみ何回猛士とか潜して、
嘉んでも
小松陽にしてみると迄は罪がないが、
困つた事には新うなると世間に後り遅い人

何とでなく私が勝つとやうな気がして、大臣
が行ど、門下生ぢやないか。自由党の名
士どつて仕様がない。況や学校の先生
なんで果の学者ぢ、門下生ぢ、なで

コノ間、一葉脱落

何となく私が勝つとやうな気がして、大臣が行ぎゝ、皆門下生ぢやないか。自由党の人達ばかりでなく、次や学校の先生と弁論を戦はしてゝ、何りで威張つてゐさ。

私のやうその理想は、人に迷惑を懸ける訳りで、一向自分の慰みとなるまい。側から視ると嗤ふ事でもあらうが、又た痛し松陰先生の事迹を繰ぎろこが、で、昭和録は暗誦してゐると、志かし此方陰崇拝が、不思議な事には、どこゝ雪江さ

人を恐ゝ邪魔にならなかつたから、其時分私の脳中には天下唯才陰先生と雪江さんと

で、昭魂録は暗誦してみると、悲かし此方陰柴紘が、不思議なる事には、些とも雪江さ

んを恐ふ卵度にならなかつたから、其時分私の脳中には天下唯一陰先生と雪江さんと有るのみぢつたつ

で、いつも学校の帰りには此二人の事を考へ〳〵帰るのこと、或日

―たしか土曜日どつちかと思ふ、土曜日は学校も早仕舞なので、さうして二人の事を考へながら帰つて見ると、二人夫婦はいつも室の居ざのに、其日は室の間に居ない。書斎かと思つて書斎へ行かうとすると、格側の畫頭の雪江さんの部屋で、

の隙で、

「誰そ、」

といふ。

私は

其日は家の間にゐない。書斎かと思つて書斎へ行かうとすると、樣似の畫師の雪江さんの部屋で、

の障で、

「誰？」

もふ。[illegible]

思はず立止つて、

「私です。」

「吉屋さん？」

私は

といふ障と共る、部屋の障子が風と開いて、雪江さんが顔ごけ出して、

「今日は芝居よ。」

「えゝ」と私は耳が信ぜられずかつて。

「でもみさんも行田さんも先刻出掛けてよ。」

「さうですか」、私は何ごとも嬉しくなつて、

「坊はゝ」

以下、三十五回目三ノ最初ノ一葉脱落セリ

東京朝日新聞原稿用紙

「もうみさんも行田さんも先刻出掛けてよ。」

別わ

東京朝日新聞原稿用紙

「さうですか」、と行きあるく言つてこが内へは来て

「まあはてゞ」

「まあはお湯へ行つて来ゞ帰つて来ふいの。」

「ちや、貴三郎一人で」

「えゝ、ミ一さ入らッしやいよ、此座

〜。好い物があるから。」

と手拭をする。

「なるほど、松陰先生崇拝の私もがタ

（と君ひ出しと。

別わ

東京朝日新聞原稿用紙

〜。好い物があるから。」

と手拭をする。

「あうかなると、松陰先生崇拜の私が夕

（と寒ひ出した。

東京朝日新聞原稿用紙

其様な日には雪江さんは必ず寒切つて早朝

寝坊をして、私がうんぞは徐々書物が高く

なる時分に、漸う起きて来る。顔を洗つて、

御飯を喰べて、其から長いこと掛つて髪を

以下、三十五回目三ノ最初一葉脱落セリ

東京朝日新聞原稿用紙

其様な日には雪江さんは直ぐ寒冒切つて早朝寝坊をして、私がうんぞは徐々書物が高しくなる時分に、漸う起きて来る。顔を洗つて、御飯を喰べて、其から長いこと掛つて髪を結ふ。結ひ終ふ頃は最う午砲どころかどうかお

東京朝日新聞原稿用紙

書はお腹が満くて喰べられない。「私慶しよ」

「よ」といふ。

朝飯で机の前で今日の新聞を一寸読む。大抵貸物ばかりだ。それから編棒と毛糸の球を持出して、暫くは黙つて切々と編物をし

東京朝日新聞

てゐる。私が用ぶ者つて部屋の前でも通る

と、「古屋さん、これ何ぼすると思つて？」

大抵編物じゃだ。そのから編棒と毛糸の球を持出して、暫くは黙って切々と編物をし

てゐる。私が用があって部屋の前でも通る

と、「古屋さん、これ何なると思って？」

と編掛けを翳して見せる。私が見んぢゃ、

何どか面白い変な猪口のやうぢ物で、何に

なるのぢか見當が附かないから、分らない

といふと、でも、あ、落て、見ろといふ。

熱考の上、「巾着でせう？」といふと、「い

いえ」、と頭振を振る。巾着でないとすると、

手袋には小さし、靴下でもなさうだし、

「あゝ、分つた！　毛糸袋じ」、と図星を言つ

と積でいふと、雪江さんは吃驚して、「ま

あ、ちがぢ！　毛糸袋じゃんぞッてこ　其編

手袋には小さい、靴下でもなさいうだし、

「あゝ、分つた！　匂袋」、と図星を言つ

と横でいふと、雪江さんは吃驚して、「ま

あ、厭だ！　匂袋ぢやうんぞッてミ芸稼

なの物は偏物にや

なの厭ッかくッてよ。」　匂袋でも

ないとすると、もう私には分らない。降参し

てしまふと、雪江さんは莞爾ともしないで、

「これ、人形の手袋。」

雪江さんは一つ事を何時までもしてゐるの

は大嫌ひだから、

私がまだ自分の部屋の茶

四畳へ帰るか帰らぬ中に、もう偏物を止め

て琴を浚つてゐる。

近頃では弟うボコンの

ベコンでも無くなりさ。始うして稽いてゐ

ると、如何しても琴に違ひないと、感心し

四畳へ帰るか帰らぬ中に、もう衣物を脱いで琴を弾いてゐる。近頃では彩うがコンの

ベコンでも無くなるし。彩うと稽いてゐると、何うしても琴に違ひないと、感心して稽恍れてゐると、十分と経たぬ中に、ジャカ〳〵ジャンと撥廻すやうな音がして、其切パタリと琴の音は止むと、もう茶の間で若い娘かな雪江さんの聲が聞える。

忽ちドタ〳〵と梯子を駆けて来る音がする。小女の松に違ひない。後からバタバタと追駆けて来るのは雪江さんに極つてゐる。

玄関で追付いて、何をお待するのだか、キ

ヤッ〳〵と騒ぐ。松が敵はなくなるって、私の部屋の前を駆抜けて茶弓へ逃込む。雪江

上

タと近寄けて来るのは雪にさんに極つてら。玄関で近付いて、何をお伺するのだか、キ

ヤツ〳〵と騒ぐ。松が歌はずくろうて、私の部屋の前を駆抜けて茶弱へ逃込む。雪に

さんが後から追寄けて行つて、まし茶弱で

一騒動やらかに、ガラ〳〵がチヤンと何かが壊れる。阿母さんが奇の間から大きな伜

で叱ると、茶弱は急に火の消えたやうに閑

寂となる。

私は、国に居る時分は、お向ふのお芳ちやんは小さい時には活潑な児だつたが、大きくなるに随れて、大層内気いて品のない

だ、あのお芳ちやんが泣きだつと。お芳ちやん——子供の時分に結く仮事をして遊ん

やん――子供の時分に結く仕事をして遊んだ、あのお芳ちやんが好きだつた。お芳ちやんは小さい時には活潑な児だつたが、大きくなるに随れて、大層物著いて品のよい娘にならつて、私は芳坊子が何となく好きだつたが、雪江さんも悪くない、と思ひながら、

芝辺机る類杖を突いてゐる中を、誰とかワツといつてドンと撞く。吃驚して振返る

と、雪江さんがキヤツ〳〵といひながら、

逃げて行く後姿が見える。私は思はず莞爾となる。

莞爾となつた儘で、尚ほ雪江さんの事を思ひ続けて、果は思ふ事が人に知れぬから好

逃げて行く後姿が見える。私は忌
はず莞爾となる。

莞爾となった儘で、尚ほ雪江さんの事を
思ひつづけて、果は忌ふ事が人に知れぬから好
いやうなものゝ、怪しからん事を内々思つ
てゐると、茶の間の縁側あたりで、オーと
いふ例の艶のある美音が聞える。
あれは地獄

の少しあきの位の所から、段々に甲高に競
上げて行つて、糸のやうに細くなつて、何
かを突脱けて、遠い〳〵彼方へ消えて行
きさうになつて、又段々競下つて来て、果
はバツと捩げさやうな太い音になつて、餘

念がない。雪江さんが内証の練習をしてゐ
るのだ。

東京朝日新聞原稿用紙

きさらにかうて、又段々競下つて来て、果はパッと捩げとやうな太い降にかうて、餘念がない。雪江さんが肉筆の練習をしてゐるのだ。

東京朝日新聞原稿用紙

東京朝日新聞原稿用紙

9

日新聞原稿用紙

[illegible]
[illegible]
[illegible]

渋川玄耳ハ当時ノ朝日新聞
學藝部長タリシ人

渋川玄耳ハ当時ノ朝日新聞
學藝部長タリシ人

二葉亭四迷 平凡原稿

特別
文庫14
A13

53 1558